

## 翻刻『女世話用文章大成』

著者	中野 節子
雑誌名	金沢大学文学部日本史学研究室紀要
巻	第1号
ページ	45-54
発行年	2005-03-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/1441">http://hdl.handle.net/2297/1441</a>

# 翻刻『女世話用文章大成』

## 翻刻にあたって

『女世話用文章大成』（上・中・下三巻）は手習い用の往来物で、既に拙書『考える女たち』<sup>(1)</sup>では本書の一对の往来を写真付きで翻刻している。また、本書の歴史上の位置、世話字と世話用文章の特徴、元禄五（一六九二）年に刊行された男性向きの『世話用文章』との関係、女性向けに漢字を多用した本書刊行意義などについても拙書で明らかにしているので、参照願いたい。拙書ではこれに加え、本書が往来物にありがちな決まり切った用文章ではなく、当時の女性の会話を聞くような内容を持っているとその感想も書いており、その当時から本書の翻刻をしたいと思いますのである。

本書は青森県弘前市立図書館架蔵にかかるが、公の施設に所蔵されているものでは本書が唯一のものである。外題は「女世話用文章」上・中・下、内題は「女世話用文章大成」となっている。最後の奥付には次のようにある。

中野節子

書林

江戸日本橋南壹丁目

須原茂兵衛

大坂本町壹丁目松寿堂

萬屋彦太郎

本書のどの往来文章も二段散らしであるが、ここではまず一段目を掲げ、続けて二段目を一段落して入れておいた。また、読点は筆者が適宜挿入したものである。

なお、本書の頭書及び、上巻末尾の「折紙目録したためやうの事」、下巻末尾の「よろづ折形の事并図」と「女手道具の図」は省略してある。ご了承を願いたい。

本書の翻刻に当たっては、弘前市立図書館のご好意、小泉吉永氏の多大なご助力を頂いた。ここにお礼を申し上げます。

註

(1) 中野節子『考える女たち——かな草子から「女大学」』（大空社、一九九七年）。

女世話字用文章大成序

夫 女筆用文章数多有といへ共、其章句大形替事なくめつら

しからず、今此世話用文章ハ章句めづらしく、其上女の弁かた  
き難字を加へ、女子の助に頼し畢、此文章をよくく習練の上ハ  
万字疎かるまじぎと、かへすく思ひまいらせ候 かしく

元禄十三庚辰歳 五月吉日 前田氏息女 さわ筆

○女世話用文章大成

- 一、正月遊び云やる世話ぶんしやう并返事
- 一、伊勢ぬけ参りの事云やるせわ文并返事
- 一、御物師雇にやるせわぶんしやう并返事
- 一、うせ物ぎんにたのミきたるふミ并返事
- 一、酒の酔に行合迷惑せし事云やる文并返事
- 一、花見に出悪口にあいたる事云やる文并返事
- 一、芝居見物に行し事いひやるふミ并返事
- 一、兄の事そしりいひやるふミ并返事
- 一、折紙目録したゝめやうの事 目録終

此春は賑敷心うきたち、昼ハ掛羽子夜ハ宝引にて、日を饋まいらせ候、終松も言旧く

夕もしも三更過まで、突鼻と鬨諍居まいらせ候て、今朝ハ朝寝い  
たしまいらせ候 かしく

何かたも是年は若栄候て、爰もとにも夜昼と賭祿にして嘉留多打、

藍も五更かたまで起居候て、東雲のしらむ折からしまひまいらせ

候、屑そもし様にも弄に御出候へかしと、御噂のミ申まいらせ候

かしく

つれく成俎に不図思ひ出し、筆染まいらせ候、一昨年今日はおい

勢様へ参り候とて、未明にそもし様へ

身のまゝぬけ参り候、其時の醜さ瀧聲候事そんしいたし、可咲

独笑いたし居まいらせ候、追手やかゝらんと、臆病神にひかさ

れ候事、今に忘れられず候 かしく

仰られ候ぬけ参りの事、去年のやうにそんし、指折いたしみまいら

せ候へハ、最早三とせに

成まいらせ候、くはうみん矢のごとし、日の斜るは間のなき事と  
存せられ候、間の山のをもしろさ、颯々踊のしほらしさ、今にわ  
すれかたく候

縫物段くつかへ候て、途方に暮まいらせ候まゝ、年齢なる御針候  
ハ、御雇下され候

御そんしの通、通例の道理は旦那殿氣に入申さす候俵、万事綻  
に美敷したてくれられ候人を、たのみまいらせ候

此御師何方此方へ参られ、人並に仕立られ候やら、いつかたにても  
被譽褒美御さ候、偏に其身の手柄と申こと三候、手續よくしごと  
擬候ハ、しかぬる人にてなく候ゆへ、雇しんしまいらせ候

無和利御むしん申、御氣骨おらし候まゝ忝思ひまいらせ候、厳御  
申下され候へとも

実否しれまいらせ候ハんよし、足裏に疵持たるものは、治情あら  
かふ物にて候、機不應なから、説破なされ下され候うへは、疑事  
御さなく候

失物の事、此ものに問くれ候へとの事、段く吟味いたしまいらせ  
候へ共、証拠正しくいひ分召れ候ゆへ、必定うち付て教訓成かた  
く候

そもし様ニハ最肩偏頗もいたし候やうに、思召候ハんすれ共、全  
我身荷膽にてハ御さなく候、此うへハ又御しあん候て、外の御料簡  
なされてよろしく候へく候と、そんしまいらせ候

昨日去方へ行候道にて、一杯機嫌の若者西風東風つけ廻、生憎と思  
ひ

まいらせ候へとも、さなから喚事も得いたし申さす、剩つれし  
ものハ這出者にて、愚鈍候て邪魔に成、足早に逃かへりまいらせ  
候 かしく

垂登者に出合なされ危めに御逢候よし、其よう成随馬鬣にハよき程  
に會釈

欺たるかよく候、傍邊に人目め候ハんまゝ、別の事も候まし  
けれとも、まつく何の怪我過も候ハて、めでたくそんしまいら  
せ候

四極山の花最中盛のよし、散なほ可惜と思ひ、鼠栗く見物にまいり候へは、颯颯の幕の内より一能くといふて

所有さしあひ悪口のほめことは、倍く恥敷もまたおかしく、ころ輝、与得花ミる事も得せず、特日もくれにをよひまいらせ候ゆへ、ちよこく奔してかへりまいらせ候 かしく

東山へ花なかめに御こし候よし、御器量すくれまいらせ候御姿を見候て

さまくとほめ言葉申まいらせ候よし、そもし様の壮年をミまいらせ候ハ、悶虚勞くとしてあたたくちき候も断て候倍く似物とそんなせられ候

歌舞伎芝居葉流候よし風聞候ゆへ、嫂とつれたち見物に参り候へは、濡おしく邪氣乱

狂言にて、真味理としたる事なく、指合たらけにて候、無術怵かね、半に立かへりまいらせ候

我身も人に誘引、敏乍こしらへ、咄破喝破として白ミせ見に行候て、

折ふし

茶屋に休るまいらせ候へハ、そもし様御通り候ゆへ、黙頭まいらせ候へとも、見ぬふりして御行候事、難面と恨に存まいらせ候

私兄さま無人望、飯染の事も氣短、大語にしかられ、何荒爾と優き事なく

常住白眼つけ姦敷申され、さるとハ瘦はてまいらせ候、内とのものまで私言譏、きのとくに思ひくらしまいらせ候

此方の兄様も変事なく強義に候て、自在な所行致され候へとも、妹に生れし悲しさは

可愛あいしらい、却降参いたしくらしまいらせ候、何方もミな何不別同し事候、兄弟ハ他人のはしまりと、世話にハよく申まいらせ候

○女世話文章大成 中

一、娘まよひ子に成候事しらせやる文并返事

一、かたびら染もやうたのミにやる文并返事

一、あつらへ物ねん入いそぎにやる文并返事

一、男童隙を出す事いひやる文并返事

一、孫長敷成しを悦ひいひやる文并返事

一、仮寝して夢に魔し事云やる文并返事

一、婚氣に入しとして悦びいひやる文并返事

一、大へい成内義をそしりいひやる文并返事

一、妹を大名奉公に出せし事云やる文并返事

秘蔵の娘まよひ出、去邊しれ申さす、妻夫ともに周章迷臆東西と尋候へ共

しれかね、天命に神仏さまへしゆくくわんかけ候へハ、神仙様の御かけにて、指南人つれかへり給り、佛々とよろこひまいらせ候御事二候

稚無二知古に迷ひ子に御成候よし、連剥帰るさを御忘れ候物二て候はん、嘸其折柄の御しんもく

愚弱理とあそはし候ハんと、おしはかりまいらせ候、さてく皆式そんし候ハて人にて申まいらせ候て、御怨候ハんとめいわ

くニ存まいらせ候、先々、目下に御かへり候よしめてたく候

此瀑時勢の颯不結たる大形に、染させ下さるへく候、往時模様は辞にて候、其うち仰山

地散靡そめ色候まゝ、よくく染物やと御たんこう下され候て、はんくよくく頼候へく候、又いつ比出来申し候や、御しらせ下され候へく候、めてたくかしく

帷子の事御申越候、我身かたへ出入いたし候紺屋御座候、今朝も参り、種々砂多の不手留風流な雛形見せまいらせ候、幸作意よき

上手にて御さ候まゝ、此もの喚につかハし、よきやうにそめさせしんし候へく候、そもし様は日比苛にて候まゝ、すいふんいそかせ忽にいたしをき申ましく候、しかし早俗にいたし候へく候、そめきハあしく候まゝさやうに御心得候へく候

頃日頼入候、あつらへ物恰合見繕に与得ねん入、自墮落になきやうに御拵たのミ候

無遺瀬やうにおほしめし候ハんすれとも、便くとなく急く御

こしたのミ候、生付の癖にて氣せきまいらせ候、何さまのちほと見且まいり、御めにかゝり申まいらせ候、かしく

御詔物、夜接日候て手にくいたし目一時の間にしんし候ハんと存まいらせ候所に、おもひの外

出来申さず、此中ハ入身うそはらちち距果まいらせ候、片時も油断いたし申事にてハ、御さなく候まゝ、追付立派にしたて、近内に持せ進し候へく候まゝ、さやうに御心得候へく候、かしく

折角御肝煎下され候男童、常強者にて旦那殿事も鍾抹に致し、安忍を

おこし、其うへ看く成  
詐事を申傍輩つきあしく候ゆへ隙をつかハし候、小飼の者にいたし向後なかくつかひ候ハんとそんしまいらせ候へとも、堪忍成かたく真平如在思召下さるましく候

重一色弗にて不継者と存、適申まいらせ候所に、皆目長敷所なく、無多口きゝ差別もなき奴のよし

人はうわかハにてハ見へぬ物かハと存せられ候、親許へ送届、乞

習氣致させ候へく候、兎角人にハそふてみよ馬にハ騎てミよと申事、今おもひあたりまいらせ候

いとくゝの孫居座候て座敷中を這躰、幾等傍に有物何と事なく散、詞は脂茶をいひ泣出し、さるとハ大膽者、親ももてあまし

かんぼうたをし、藐も寔瘦はて、いかひ世話にて候、しかし、動乳をあまし目を見つめ、卒死をいたし候、若胞瘡の煩熱てもや候ハんこと案しまいらせ候、些御越候て、御覽下され候ハゝかたしけなくよろこひまいらせ候、かしく

御奔走の孫子さま、おとなしく、人臆面もなく悼く阿和晒手打く

の真似  
流石氏より生長にて温蕩なる生質、有福にミへまいらせ候、熱氣出て御氣つかいに思召候よし、さためて寤冷か知恵ほとをりにて候ハんまゝ、御きもしなされましく候

心氣つかれ草臥候ゆへ、ひよつと仮寝いたし候、夢に雨微降夜共恵行ともしらす

惘然く出まいらせ候へは、ミちの真先にわかひ女子、跋髪を乱、徒空念としてぬまいらせ候、戦慄泣叫、魔まいらせ候、目覚てのうれしさ、身うちにしつほりと汗かき居まいらせ候

御真眠候へは、無逢轍夢御覽候よし、さやうの時ハ氣疎寤ものニて候、能く存候へは

夢程不思議なる物ハなく候、おもひかけなき事を、ありくと見る事まゝ多く御さ候、其内あしき夢を見まいらせ候時ハ、氣にかゝり氣味のわるき物ニて候 かしく

喚向まいらせ候婚、中く健人ニて、我身事面倒にも思ハれず、孝行ニしてくれられ、皆く鐘愛、悦申御事候、其うへ不忍の心すきとなく

浮波くと鹿相成所ハ、卒度もなくうちつき、物の云為一つとして徒事も候ハて、世諦かたハ万事に氣をつけ、始末しられかしこき人ニて御さ候、心たてしんまくニなく、儼として、人のすぐ客議ニて候、左右人は心ニて御さ候 かしく

仲人申入候御婦人様、御心に入候よし、何より嬉しく候、早晩ちよつと御出ニて候ゆへ

許諾 姑様へ心つけ第一になされ候へとまいらせ候、又ハ如鼓くとはしちかくへ出、漂軽らしきはなしなど、大語になされましきと申まいらせ候へハ、合点のよき御人ニて、賑然とまいらせ候て御さ候 かしく

先文字始て御けん成候御内儀様、去方ニて又出合まいらせ候か、人を云平懐腑悪人ニて候

身成行一風候て何とやらん物のはてのやうに、そんなせられ候と、ミなく謚僉議区ニて御さ候、かさねてつきあひ申事ハいやニて候と申事ニて候

御玉章なかめ入まいらせ候、何さま女子の詞に勿云勿為などいふ事、常の女子いわん事ニて候

まことにたちハふりを頭とやらん、湯女・傾城のはてのやうにみへまいらせ候、曠人事ニて御さ候、人を向下候事、身の程しらぬ人と殊咲く思ひまいらせ候 めてたくかしく



人は心程の繇世と申事妹にて思ひ当候、幼稚の時より氣の引張たる  
珪惠奴にて、大名奉公より

まいらせ候か此頃ありつき、十三くとして下りまいらせ候、し  
かし母様よろこひの中のなげきにて、今生にてハ逢事ならぬやうに  
思召、恋憧させ給ひ、轟めいわくいたしまいらせ候

○女世話用文章大成 下

- 一、加茂の競馬見物に行し事云やる文并返事
- 一、お物師紅たち損ないし事云やる文并返事
- 一、けし人形もらひ礼をいひやる文并返事
- 一、大名奉公の目見へ出立を問にやる文并返事
- 一、きぬの襦袢そめやう頼にやる文并返事
- 一、初雪ふりながめ入酒宴の事云やる文并返事
- 一、くわんをんめぐりせし事云やる文并返事
- 一、よろづ折形の事并図
- 一、女手道具の図

殿達に唆され候て、加茂の競馬見物に参り候、中く何より治合あ

る、おもしろき

見ものにて御さ候、何としてか太 逞 馬斑人くんじゆの中へ轟驛  
といなや、是抑いか成事が出来ると恻怕、をし合儼半死したる人  
多御さ候、かさねて参り候事いやにて候

自も五月朔日の足そろへに、過し年まいり候か、相図の太鼓丁扣と  
驅出し

勝負の木のもと迄颯と入、榿籠をあらそひ、凱音あくる早俗を見  
まいらせ候へハ、少氣成ものは、中く氣の減事候、見物の官衆  
活くとして声をあげ為答をと、地響いたし、物廓然き事にて候

拵にいたし候半与存、紅巻足此中濃御物師に擬まいらせ候へハ、  
分くくに裁毀

縫め唱斜無作口作としたる、仕たて袂のかけやう、纏なともせ  
はくして散々の物にて候、あれにて物ぬひにて候なと、呀事、  
人を儼獨やうな事にて候

大事の御小袖段くくに裁崩、其上仕立もよろしからず候よし、阿房敷

事ニて候、不ま会候ハ、かたから取とつ事、いらさる物ニて候、縫ぬい括くわ云いたてニて

御奉公ごほうこうに來申候よし、口入くわいれの人も知ぬといふ事は有ましく候ニ、かへ候やうな事ニ候、親おやは名なたかき仕立したてしやニて候よし、聞きまいらせ候か、漸やく、其そのくらゐならハ、褒ほめ授まいたし候はかりニて候ハん、まことに手理ていきの子ハ手て榎えちと申ままいらせ候事、此人このひとの事ニて候

弄もとして乙松おとまつかたへ幼氣いぢげなる嬰けし粟し人形にんぎやうしなく給たまり、重宝ていほういたし多集た菟かり並置ならんをま

一切いっけつと打詠うちやいまいらせ候、中なにも捻合ねあひ相授あせして居申候やつこ却合はげん一いつしほ可笑おかし、咄笑どつとわらひ、祖母はば様さまも冷咲にがわひして御ごさ候、御礼ごれいのため申入ままいらせ候

愛想あいさうにも成候ハんとそんし、余よ所ところより貰もらまいらせ候ゆへ、しんし候所に、扼うして居みまいらせ候躰てい、放廣ほどけ可咲おかしとの事

こゝもとニても打うより沼田ぬまたうつてわらひまいらせ候、其許そのこゝろ心膜しんまくなる御ご姫ひめ様さまへ、忍笑にんせうし給たまふとの御事ごじ、大かたならぬ興きやうに成候と、いかほどかまんそくにそんしまいらせ候

御心ごこころ安やすさのまゝ、窺うかがひのため文ふみして申ままいらせ候、御目見ごめへの上服うへまは縮緬ちりめんの地白ちしろけんしもやう、金紗きんしや入い

帯おビハ紺繻子こんしゆすをいたし榻褌うしかけニて、下髮さげ缺腋くわくやくにして、出申いで覚悟かくご候て御ごさ候、此通このとほニてよく候ハんや、御申ごまを頼上たより候、又またく何時なんときニまいり可か申候や、御ごさつし待まちまいらせ候 かしく

細々こまとの御ごせうそこ、詠ながめ入いまいらせ候、衣裳いせうつきの品々御申ごまこし候、中なく、奇羅美きらみやなる御出いでたちニて候

帔かきをめし竹輿かこニて御越ひるまが候へく候、日英ひがいに御迎むかいに人ひとしんし候ハんまゝ、御拵ごしらへ候て御待しゆび候へく候、首尾あひすよく相濟あ候へハ、直すくに御湯ゆもの有答あるはうニ候まゝ、浴衣ゆかたなども御用意ようい候て、よろしく候へく候 かし

此絹褌このぬいばんにいたし、肌はだに着き候へく候と思おもひまいらせ候まゝ、鬱金うこんに染そめ下くださるへく候、碾茶とのちやの下衫したまも

もはや檻褌つとれに成候て、きられ候ハす、千斎茶せんさいちやのは外母うはにとらせ、其外そのほかハ拵すせつきてき候へく候、見苦みくる敷敷しきずなく候て、常住じやうぢゆう着きにことをかきまいらせ候

汗衫動下くとやふれ、ことかき遊され候とて、染させくれ候へと  
の御事、御好の色より、下地を藍ニそめ

瑠璃紺か檳榔子になされ候ハ、よろしく候へく候、又ハ萌黄ニて  
もよく候ハんと存まいらせ候、世間ニ憲法そめいたし候事、世帯も  
ちのする事ニてハ御さなく候 かしく

珍敷初雪降発く詠、古歌など吟しまいらせ候へは、女子共陰氣な  
偏廻と申て、雪消にとて

酒を湛とのミあひ、後ニハ心そけ顔尤赤になし、たかひにしいや  
ひ、時行小うたうたひしともなくして暮まいらせ候 かしく

此方にも花の雪吹にまかふ雪をあつめ、雪転雪うち、氷か泮にさゝ  
ひとつなといふて、閑居離の

水あびるやうに總威に酔つふれ手車にのり、重祭く、蹲踞くくと  
申、女子のあはれ申事、馬子成事と銀評としかりまいらせ候、都詰  
所ハ主の名たつ事ニ候

観音巡致候半とそんし、行暗しふんに内を出候へは、霧深真闇ニ

て、人おもてもミへす、杖ニて探廻

漸く道筋に出申候、親たる人され候ハ、夜三更、東しらミてか  
ら出候へと申され候を聞入す、情強ニ出、道ニて何程か後悔いた  
しまいらせ候 かしく

我も東雲未明うちに、歩行候へは、思ひの外難義なる迷ひ道に出、  
迷惑致候

方様ニも此ほと観音詣ての折から、御踏まかひ候よし左行右行なさ  
れ候ゆへにや、かさねてハ夜深にハ、いらぬものニて候